



まず大切なのは住民たちの意識向上。集落ごとにミーティングを開いている

宮崎の鉱山被害の経験から 生まれたつながり

今から約40年前、大手新聞社の記者だった川原一之さんは、宮崎県北部の村落、土呂久に通っていた。鉱山開発によって引き起こされた砒素汚染に苦しんでいる住民たち取材し、その現状を伝えるためだ。1970年代初め、この一帯では、砒素による健康被害が明らかになりながらも、それを認めない企業と国、住民の対立が続いていた。「数年後に福岡に異動になったのですが、心のどこかで土呂久のことが気になっていました。川原さんが一大決心をし、新聞記者を辞めて移住したのは75年。地域住民が立ち上げた「土呂久・松尾等鉱山の被害者を守る会」を、印



どの水源が汚染されているか、地図に落とし込んで対策を考える

刷会社に勤めながら手伝うことになった。

80年代には和解が成立したが、同会は住民たちの懇親の場として活動を継続。春はお花見、秋は紅葉狩り。季節の移り変わりを共にし、鉱山が残した苦難から立ち上がるうとしていた。そんな時のことだ。「アジアで砒素被害が広まっているらしい」。思いもよらない情報が川原さんたちの耳に入ってきた。「土呂久の経験で何か役に立てることがあるのではないか」。そんな声が上がったのは、自然な流れだった。

そして94年、同会のメンバーを中心にNPO法人アジア砒素ネットワーク(AAN)が誕生。団体名の通り、その目的は「アジアの人々を砒素被害から救うこと」。早速、調査のためにタイに



国際協力の担い手たち

NPO法人 アジア砒素ネットワーク

日本の経験で安全な水をつくる

日本の小さな村で生まれたNGO、NPO法人アジア砒素ネットワーク。その活動先は南アジアのバングラデシュ。地元宮崎での経験を生かし、安全な水づくりに取り組んでいる。



ジョゾール県
バングラデシュ



深井戸であれば、砒素が混じることはない。人力で深さ200メートルの井戸を掘る

足を運び、その翌年にはインドで開催された砒素被害の国際会議に出席した。

そこで運命的な出会いを果たす。彼らがその後、心血を注ぐことになるバングラデシュだ。「会議の出席者で砒素被害の現場を視察することになり、バングラデシュから来た方と同じ車になりました。

そこで彼らの国の状況を知った。「地下水は聞いたのです。地下水は砒素に汚染され、住民たちはそれを知らずに飲んでしまう。その結果、皮膚症状が出る人は増えるばかり。それを聞き、自分たちが手を差し伸べるべきなのは、この人たちだと思った。直感だった。『今思えば、土呂久の神様が導いてくれたのかもしれない』と川原さんは振り返る。

バングラデシュの人々を 砒素被害から救いたい

そこから全ては動き出した。活動地は、インドと国境を接する南西部のジョゾール県に決定。中でも深刻な被害が疑われるシャムタ村をパイロット地区に、宮崎大学の横田漢教授(現AAN理事長)と連携しながら、井戸の水質、砒素被害の患者の症状などを徹底的に調査した。宮崎大学の学生たちの協力



地理情報システム(GIS)を使った地図の作成を指導するのは宮崎公立大学の辻利則教授。現地の人たちが使いやすいシステムづくりに奮闘

も得て、その要素を全て落とし込んだ地図を作成した。そうすることで、この村の砒素汚染の全容が見えてきた。そこでAANが提案したのが「移動砒素センター」の設置だった。水質調査の専門家、水源建設の技術者、医療関係者などがマイクロバスで汚染地域を巡り、砒素の毒性を伝える啓発活動などを行っていくというもの。一刻も早く、状況を改善に導くための最善策だった。

並行して、川原さんたちも自らの足を使い、水源の汚染を軽減するためにろ過装置の設置などに懸命に取り組んだ。最初は彼らを敬遠していた住民たちも「地下水にそんなに悪い物質が含まれているなんて知らなかった。安全な水を飲むように協力するから」と、次第に理解を示してくれるようになって

た。JICA草の根技術協力事業なども活用しながら、その取り組みは県内の他の地域にも拡大。あつという間に10年が過ぎていった。

一つの節目を迎えた川原さんたちは、自分たちの活動を振り返るため、これまで支援した村の状況を調べることにした。すると、「これまで設置した214基の代替水源のうち、約半分が壊れたまま放置されていました。利用者組合を作って維持管理を委ねていたのですが」。AANのスタッフが定期的に訪問できる時はよかった。しかし住民自身の手で継続的に井戸の維持管理を続けることは、資金的な制約もあって困難だった。

住民たちの力だけでは限界がある。そこで川原さんたちは考えた。「最近こそはやはり、行政がきちんと責任を持つてやるべき」。そこで今取り組んでいるのが、地方行政(ユニオン)の能力強化だ。ユニオンが主体となり、安全な水供給計画の策定、水源の定期検査や修理、簡易砒素検査など、包括的なサービスを提供できる仕組みづくりを進めている。

「あと数年したら引退かな」と笑う川原さん。しかしその瞳の奥には、まだまだできることはある、という強い意志が感じられた。土呂久からつながった縁が、バングラデシュの人々の生活を変えようとしている。



「バングラデシュの人たちに『おいしい水が飲めるようになってうれしい』と言われると力が湧いてきます」と川原さん